# 茨城大学国語教育学会の十年

橘　豊

昭和五十六年に発足した茨城大学国語教育学会は、創立以来既に十年を経過した。この学会の設立の趣旨は、会則の第二条（目的）に「国語教育・国語学・国文学・漢文学・書道に関する研究の推進と会員相互の親和を図る」とある通り、国語教育等の研究の開発・発表と、今一つは会員間の親睦を目的とするものである。発足した時期は、丁度教育学部が、大学院修士課程の概算要求をめざして整備中であったこととも重なり、大学院が設置されれば、院生にとって研究発表の場が必要となることが予想されたので、それに備える意味もあった。それと、国語講座の教員と、附属校の教員とが、懇親と情報交換の意味とから、毎年集まることがあったのを、この会を開くことで定例化しようとの目論見もあり、また、卒業生が、年に一度集まるのに、この会が中心になったらよいとの思惑もあって、この会に対する期待が膨らんで行ったように記憶している。

昭和五十六年二月に開かれた第一回大会は、故金沢直人先生の定年退官記念講演で花を添え、第二回以後は茨城大学を中心に開催していたが、第七回（昭和六十二年度）以降は、附属校に会場を移して、授業研究を中心に、大会を開くことになった。国語教育は、何等かの意味で、教育実践、すなわち学校の国語の授業に結び付かなければ意味がない、との思い入れもあってのことであった。附属校での発表会も回を重ね、一方大学院も発足して院生が研究発表に加わるようになり、そして平成三年度、十周年記念大会は、遂に永年の念願であった、公立学校を会場としての大会に漕ぎ着けることができた。水戸市の梅が丘小学校を会場としての第十一回大会がそれであった。

一般に人間の個体には終りがあるが、人間の作った組織は不滅であると考えられている。しかし、組織が永世であるためには、それが後継者によってしっかりと継承されて行くことが必要であって、暖簾を守る人がいなければ、老舗も廃業に追い込まれる例があるように、どんな組織であっても、それを受け継いで育てて行こうとする人がいないと、遠からず終焉を迎えることになる。学会もそうであり、それを守り立てていこうとする構成員の熱意と努力とが結集して、はじめて永続するのであると思う。

ささやかながら、地域の国語教育の充実発展に寄与しているという自負に支えられて、細々ながら、よくぞ今日まで続いてきたと思うにつけ、今後とも会を発展させていくために、会員諸賢の、これまでに変らぬ御支援を戴きたいと願う次第である。

（茨城大学）